

西川正子

句集

雁木

母の句集に寄せて

恥ずかしいことに、この句集の校正作業で母の俳句をはじめてきちんと読んだ。涙腺が緩んで作業は何度も中断を強いられた。母はこんな思いを胸に秘めながら懸命に、零細企業に勤務する父を支え、私と弟を育ててくれたのかと。父は六〇歳の誕生日の直後に食道がんの手術を受けた。手術終了後に母と私は執刀医によばれた。そして、切除された父のどす黒い食道と胃をみせられつつ医師の「遅きに失した手術でした」との言葉を聞いた。

余命一年から一年半と宣告されたが、幸い父はその後七年を生きた。その間に弟は就職し、私も結婚して両親の元を離れた。まもなく父母も住まいだった神奈川県大和市の社宅を出て、新潟県上越市高田の実家に戻った。実家の新築がなつて半年も経たないうちに父は他界した。「病む夫の寢息正しく良夜かな」（二十一頁二句目）という句には、母が父のわがまよに手を焼きながら世話に当たっていた苦労がこめられているのだろう。

父の死後、母は二〇年以上そこで一人暮らしをすることになる。「初化粧してもう泣かぬもう泣かぬ」(三十六頁二句目)と悲しみから立ち直り、「まだ馴れぬ独りの煮炊き春浅し」(三十八頁二句目)という生活にも慣れていった。とはいえ「秋暑し人も電話も来ぬ日なり」(六十七頁二句目)の日々も少なくなかったはずである。里歸りをもつとすればよかったと親不孝を反省した。それでも「雪達磨つくる不惑の兄おとうと」(八十六頁一句目)の句にはほっとさせられた。帰省時に大雪が降ったことがあり、止んだ後私と弟が、私の娘たちのために雪だるま(かまくら)だったはずだが)をつくってやったのだ。

その意味では、「スイトピー子の連れて来るひとを待つ」(二十四頁一句目)「祝婚に向ふ途上の遅桜」(三十三頁二句目)は、前者が私の、後者が弟の慶事を詠んだものである。句調の明るさに多少は心が軽くなった。

「終の地へ戻る荷づくり遠かなかな」(三十一頁一句目)とある。母は生まれ故郷が「終の地」になると信じて疑わなかったに違いない。父はそうだったが、母はそうならなかった。二〇一九年夏に叔父から電話があり、母がめまいで倒れて頭を切って数針縫ったと連絡を受けた。当時母は八十五歳だった。認知症も進行しつつあった。一人暮らしはもう困難だ

ろうと私たちは考えて、高齢者施設さがしに奔走した。その結果、相模原市にある施設に入居先を決めた。転居の意を告げると、母は自分一人でもできるのになぜ？と反発した。なにより、「燕来る雪の高田の雁木かな」（五十六頁一句目）など句集にたびたび登場する、大好きな雁木の街にずっといたかったのである。句集に採られた句を読んでそれを痛感させられた。

けれどもこのままでは叔父はじめ親戚に迷惑がかかる。運悪く近所にあつたスーパーが閉店することになり、食材の買い出しもままならなくなる。私たちは「お試しだから」「気に入らなければ帰れるから」とほぼ詐欺まがいの甘言を弄して、相模原市の施設に「体験入居」させた。そこへ向かうため乗車した北陸新幹線の車内で、母が「虹だ」と言った。車窓をみると確かに虹がかかっていた。母の門出を祝ってくれたのだと考えるほかなかった。

相模原市の施設は、母の言葉を借りれば「上げ膳据え膳」で、部屋の窓からは妙高山に代わって大山がみえた。もちろん冬に「雪道をつけて一人の出入りなる」（五十四頁一句目）といった心配もない。入居当初こそ警戒心でぴりぴりしていた。だが、やがて本人の人徳かほかの入居者の方から好かれるようになっていったようだ。たまに面会にいくと、この

住まいを「わが家」とよぶので安心した。

しかし安定は長くは続かなかった。二〇二一年六月の夜に施設の方から、意識混濁となり救急搬送したとの電話が入った。搬送先の病院にかけつけると、脳出血なのでただちに脳外科のある病院に入院させるよう言われた。その病院に一か月ほど入院し、続いてリハビリ病院に四か月弱入院した。現在は八王子市の郊外にある長期療養型の介護医療院にいる。

二〇二一年は上越市の実家を引き払い、さらに相模原市の施設からの退去とあわただしかった。「整理してそこはかと秋文机」（十頁二句目）と句にある、母が娘時代から愛用してきた文机も処分せざるを得なくなり辛かった。

せめてもの埋め合わせに、句集が米寿に間に合って胸をなで下ろしている。

そもそも母の句集を刊行しようというアイデアは弟のパートナーによる。母が相模原市の施設に転居してから、彼女が母にこの話をもちかけ母に選句を勧めた。迷った挙げ句に、本句集に収められた二五〇あまりの句がようやく選ばれた。母が詠んだ句はその十倍以上もあった。それらを収めたノートには、句誌を主宰する先生から褒められたなどのメモが句に追記されていたりする。よほどうれしかったのだろう。母は俳句に加えて俳画もたし

なんでいた。それが句集のところどころに配され彩りになっている。レイアウトも凝っていて「上付きのレイアウトにすることで、句列が上から下へ垂れてみえ、雁木越しに見える氷柱や、空から降ってくる雪霽の様子を文字列でも表現」したものだ。

各ページは十三行であり、「各句を、五・七・五・五・七・五と俳句の文字数の行取りで送ることで、どのページも異なるレイアウトが実現」されている。「散らし書き」を意識したレイアウトである。「かゆいところに手が届く」とはこのことだろう。涼子さん、ありがとう!! 彼女が作成した版下を私、弟・隆夫、私の妻・伴子、そして私と伴子の娘である梓と結がノートに書かれた母の句と照合するなどして、句集の仕上げに携わった。

結びに母の句で私が一番好きな句を掲げよう。「貧農の六女と生れ雛もなし」(十三頁一句目)。母の性格と生き様を象徴している。しかし、「雛はあつた」と思わせる句集ができて本当によかった。

二〇二二年一月三日

西川 伸一